

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学 専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	21 世紀社会デザイン研究科・教授	北山晴一 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	支援の思想、支援者の生き方—水俣の事例		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	21 世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻後期課程 1 年	稲垣聖子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、水俣病事件における支援者たちの活動について、彼らの思想、倫理観、実践について探求を試みるものである。方法として支援者たちにインタビューを行い、そこから考察することを試みた。内容として①水俣病運動にかかわった動機②水俣病事件から学んだこと③水俣病事件がその後の生き方に与えた影響④経験が現在どのように生かされているのか⑤今後目指すものの 5 点を中心にインタビューを試みた。財団法人水俣病センター相思社の元職員、元チッソ労働組合—第一組合—のメンバー（以下第一組合員）のインタビューを行った。チッソの労働争議—安賃闘争が水俣病闘争に与えた影響について考察した

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[水俣病] [相思社] [チッソ第一組合]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今回の研究は、水俣病事件の中で支援者の活動について探求するものである。支援者たちの思想、倫理観、それに基づいた彼らの実践のあり方について考察する。水俣病患者たちの運動は、多くの人たちの共感をよび、様々な人たちが患者運動を支援した。本研究では、水俣病患者の支援で中心的な役割を担ったと考えられる、財団法人水俣病センター相思社(以下相思社)の元職員たちの活動と、水俣病事件の中で重要な役割を果たしたと考えられる、チッソの労働組合—第一組合—(以下第一組合)の活動を取り上げる。それぞれの人たちが水俣病患者の支援活動の中で果たした役割と、支援活動を行うようになった動機、生きかたに与えた影響と、現在の生活にどのようななかかわりがあるのか等を中心に考察を行った。

その方法として、相思社の元職員たちと第一組合のメンバーに対するインタビューを行った。また第一組合員に関しては、メンバーである水俣病対策市民会議(以下市民会議)の当時の資料と、第一組合の機関紙、チッソの労働争議である安賃闘争時資料から考察を試みた。また、相思社の設立の背景として、相思社の設立の背景となったと考えられる水俣病を告発する会(以下告発する会)の活動について、告発する会の機関紙「告発」、また相思社の活動について「水俣」などの文献を通して考察を行った。

インタビューは、2008年1月30日から2月2日にかけて水俣でおこなった。ただし一部は、2007年夏に電話で話を聞いた。また文献調査は、主に財団法人水俣病センター相思社のデータベースを使用した。

チッソと水俣の地域社会

1945年の敗戦によりチッソは、資産の80%を占めていた海外資産の全てを失い水俣に引き上げてきた。戦後水俣工場の幹部となる人たちは、朝鮮からの引き上げ者たちであった。チッソは、水俣から採用するのは中卒の現場の工員、高卒や大卒の社員は水俣以外から採用し、地元採用の中卒現場工員と高卒・大卒の分断を露骨におこなった。

しかし、水俣では、チッソあつての水俣という意識が強く、水俣市の経済はチッソに依存していた。またチッソの従業員の中には、親兄弟ともチッソの従業員というのも珍しくなかった。またチッソは、文化的な催しにも力を注ぎ、熊本市や東京から先生を招き、市の有力者の人たちと一緒に茶道、華道、お能などのお稽古事などを開催した。ダンスや野球などのサークル活動も盛んで、「文化の窓口」であり、チッソの運動会は、地域全体のお祭りであった。またチッソに入社することは、地元ではあこがれであり、誇りを持っていた。

「水俣出身の人たちには社員登用試験を受けさせて、係長の下に係員になり職制が支配していく。上層部は全部学卒で、よそから連れてきた連中です。一人一人職制を使って家族ぐるみで上手に付き合った。従業員から集めたお金で文化スポーツなどのサークルを作り運営する。東京や熊本から先生を呼んで、そこに中心的な市民も参加しつながらを作る」(第一組合員インタビュー2008年1月)

安賃闘争と水俣病事件

水俣病の発生時は、労働組合は会社と一体となり、チッソを擁護したが、1962年に起った労働争議に組合側が敗北し、第二組合が作られ、第一組合員は徹底した差別され、以後水俣病患者を支援するようになる。次のように語っている。

「闘争が終わって、第一組合員は自宅待機や元の職場に復帰させなかった。会社では第二組合に入るように職制を使って説得させる。徹底した差別と分断、合理化推進です。毎日毎日が職場の中では、第二組合の職制、チッソ資本そのものと真っ向から対決せざるを得ない。労働者たちを鍛え上げました。その中で新潟の患者たちとの交流を通して患者さんの深刻な状況が明らかになった。自分たちに対する仕打ちと同じことをチッソは患者たちにやっている。チッソは労働災害が多かった。その被害者は地元の労働者、水俣病の被害者も地元の人です。市民会議が結成されて、患者さんたちの支援に取り組み始め、そして水俣病に取り組みでこなかったことを恥とする恥宣言を出した。そして第一組合員が第一次訴訟で原告側の証人になり、工場内部について証言しました。」(同上)

1968年に水俣で最初の支援組織である市民会議が結成されたが、その主なメンバーは、当時の資料によれば、水俣の地元の労組を中心とし、主婦や医者、看護婦などもメンバーであり、水俣の地域に密着した地域住民たちの組織であり、多くの第一組合員たちもメンバーであった。1968年には水俣病問題に取り組みななかったことを恥とする恥宣言を出し、水俣病患者の支援に取り組みようになる。彼らが第一次訴訟で証言し、工場内部の様子が明らかになり、原告の勝訴につながったと考えられている。市民会議は、水俣地域に密着した組織であり、患者の身近で彼らを支え、特に第一次訴訟を支援した。市民会議は石牟礼道子、松本勉もメンバーであった。

そして全国に水俣病患者を支援する水俣病を告発する会が全国に結成される。当時、石牟礼道子の『苦海浄土』を読み告発する会に参加し、支援活動を行う若者が多かった。彼らの中から水俣に移住し、患者たちの支援を行う者たちが出てきた。水俣病患者の支援を目的として設立された相思社の活動は、このような若者たちによって担われてい

研究成果の概要 つづき

相思社の活動

相思社設立時には水俣病闘争は終わったと考えられ、新しい支援のあり方が求められていた。患者たちが相思社に求めたのは、抛り所であり、働き場所であり、台風の避難所のような所であり、運動の拠点ではなかった。しかし、未認定問題の広がり、相思社を「はげしいたかい」に巻き込んでいく。彼らの活動は、何度かの変遷を経て、現在は相思社を退職した職員9名が有限会社ガイアみなまた（以下ガイア）を設立し、そこで続けられている。今回の支援者のインタビューは、相思社の元職員3名にインタビューを行った。彼らは、相思社の活動を中心的に担ったと考えられるからである。

インタビューから

①水俣とかかわったきっかけと相思社での活動及び水俣で目指そうとしたもの

『苦海浄土』を読んで、水俣に住みたいと思った。告発する会の活動で相思社を紹介された。相思社では、男女の区別もなく、全てが自主管理で自分のやりたいことができた。相思社では、地域で活動しながら新しい人間関係を作り出せる、事業という具体的な形にできることが魅力的だった。相思社が職場というだけでなく、暮らし全般にかかわる場であることが楽しくおもしろかった。新しい生きかたを求めていた。」(Fさん)

「水俣に行きたいと思って、大学時代に患者の家の手伝いをやりそのまま水俣に住んでいる。相思社では環境調査の仕事をし、天草の聞き取り調査を行った。自分が水俣でやりたかったのは未認定患者も含めた患者の復権だった。相思社では患者のためにやる。やらねばならなかった。」(Nさん)

「たまたま相思社に立ち寄った。相思社での暮しは楽しかった。経費削減、活動領域の拡大、自分たちの活動の範囲を増やしていくことができた。相思社を退職してもそのような暮らしを続けたいと思った。」(Tさん)

水俣に住み始めるきっかけは、水俣病患者運動の支援活動が大きかったと考えられる。また相思社の職員たちは、新しい生きかたを求め、その場として相思社を考えていたこと、また相思社職員が常に患者の為にあるという重さを背負っていることがわかる。

②現在の生活と今後の課題

「現在は市議会議員ではありませんが、市議会議員をめざしたのは、女が議会にいなかった。また水俣の経験を市議会で生かさないといけなと思ったから。現在は、産業廃棄物処理場反対の運動に取り組んでいる。これは女性ががんばっている運動で、水俣病も同じ産業廃棄物で、水俣市にはチッソの産業廃棄物で埋め立てられた場所がたくさんあります。でも今回の処分場は、水源である所に作られようとしています。チッソもやらなかったこと、絶対やめたい。」(Fさん)

「現在は、水俣市の鮮魚商組合の会長です。水俣病のことは、96年の政府解決策あたりからおおっぴらに話せるようになりました。自分も相談されたし申請の手続きも手伝った。自分が相思社の職員だったことを知らない若い人たち（組合員）も増えました。現在は、魚の価格が下がって漁師も鮮魚商も市場も大変苦戦している。なんとかしないとイケませんがとても自分の手に負える問題ではなくて、もっと構造的なものだと思う。現在は、漁業組合が確保した森林に木を植えたりするボランティア活動をしています。今は支援者ではなくて、魚屋とそのお客という関係です。自分のお客がいる地域をまわっています。」(Nさん)

「現在は、ガイアの仕事と申請協の事務局の仕事です。相思社の時は、人との付き合いも仕事だと思いましたが、ガイアでは、地域の人たちと自分流の付き合いができるようになりました。相思社では、いつも患者や運動を意識していましたが、ガイアではそれがなくなりました。軽くなったと思います。」(Tさん)

現在、3人がそれぞれ自分の生活を持ちながら地域で活動を続けている。Nさんは、魚屋になり、さらに鮮魚商組合の会長まで務める。鮮魚商組合は水俣病を最も忌避した人たちの一つであった。彼らもまた水俣病の申請をし、そして、その会長を水俣病患者の支援者で相思社の元職員が務めるという事実が解った。またFさんは、水俣に建設されようとしている産業廃棄物の反対運動に地域の人たちと共にかかわり、その中で中心的な役割を果たしている。水俣では市内のほとんどの団体が反対している。そこでも水俣病の教訓が語られているという。Nさんは、鮮魚商組合の人たちが、水俣病の申請やその相談を自分に持ちかけたことについて、96年の政府解決策以降の地域社会の変化があるというが、やはり水俣病に対する感情は以前に比べて変化したと考える。

今回の研究当初の計画では、第一組合の活動については調査の予定はなかったが、調査を進めていく中で、彼らの支援活動に果たした役割について調査の必要性を強く考えるようになった。その理由は、水俣病患者たちの最初の支援組織であり、水俣地域で活動する水俣病対策支援会議（以下市民会議）の主要なメンバーであり、水俣病の第一次訴訟で証言し、その証言が水俣病事件の中で果たした役割が大きかったといわれているからである。そのために相思社に加えて、第一組合員の調査を行うことになった。相思社に加えて、第一組合員の調査を行うことが出来たのは、従来の研究が明らかにすることができなかった成果である。

今後はこの両者の関係を明らかにするため、異なった状況下にあったと考えられる新潟水俣病との比較などを考えている。

※ この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

第2回社会デザイン学会 2007年12月2日 立教大学

水俣病事件における支援活動の変容
—財団法人水俣病センター相思社の職員の活動—